

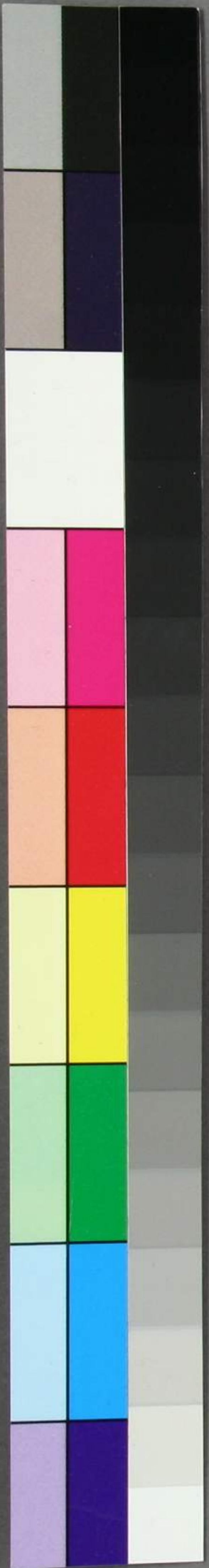
笑談貧福軍記

せうだんひんぷくぐんね

二編



遠 1897 4





大正 同

二編緒 精神

歳旦の試筆。何々の後せん。博學の...  
批上は向へど。作者と文房拙く。真去筆の先を  
引く。細く短き方を以て。以て程似る。作  
とて。詩作の韻字を踏まば。子亦於業  
ありぬ。吾流を以て。根氣を減さん。子  
生活が肝心と。去年の仕さし。の編を次ぐ。貧福  
子旅の軍の條。如冊中が亦。題の業あり。たと

13  
1897  
4





あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ

あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ  
あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ

あまの ちゑぶらろ ちゑぶらろ ちゑぶらろ

一荷堂主人誌







貪方軍師

二面將 藍成安



福方勇將

海吳船大夫 積教





街髪結之丞助成

婿可慶



福方  
老臣  
廣井繁守  
官吉

曾吉良女  
徒娘



二編 條標

第四回

貧富の両軍盛衰山下小戦

第五回

海辺大船大勇戦して貧軍を破

第六回

山子の里小成安密計をいひ

條目終

笑談貧福軍話二編卷之上

浪華 一荷堂半水戯編

貧富

貧富の両軍盛衰山下小戦

去程は身上屋貧助のまどふ非人とあると貧富之神の  
示現より不慮得る貧術の自在の風よりきて  
漂々然と虚空を往く。三百酒手の通ひ舟もあつく  
およむぬ心地ぞと。今ハ貧苦を去ることを天稟を多く  
らうき出。早竹氣とて又拍子ととり。一里来とやら



千里をらふきぬ闇夜も今ハをや東雲告る鐘の聲  
たるりの下に聞へし。貪助こころいさこち。明行  
不下界と見え。困ハ何處り知らむとも。この見盛ら  
し。城廓又ほきこの古幕張廻し。龍茶色ある破き  
旗又風をかりて立る。其外幕木錯危丁がりとり  
上く瘦背張大将始免万卒迄水囊箱と兜とほし。  
薦半畳又身とる。免早出陳の形相又貪助ること  
手とらる。こそぞ真の貪助の本城あるからし。

あら面白く。さらば見物いさんと。かよはる身  
止免道者が戯場見ると。口はんと余念多く眼  
むせど見さる。○這首小貪州借錢城の大愁貪  
之正智難中納者。夏好公へ貪之神の言小より彼福  
の金威をそひ。福者と一時小倒さんめと無分別ある貪  
性。集免觀樂城を責亡し。貪之心の俣とせんと。諸  
国へ其由觸さる。凡世上ハ九分九厘貪者。の味方小著し  
く。貪方一同勇氣を増し。中も軍師。二面將監成安

入道記 二編

上ノ上



ハ諸將又下知して備へせよとて軍馳定りて觀樂城  
 借り倒さん其出陣せよとてしるる。項ハ證文觀年  
 限月近き日借錢城と進發せよ。其先陣六年州小丸  
 の城主借金員身守歳益二陣ハ着身氣の傍の城主  
 素嘉嘉身濃守冬難三陣節前田他行城主原井内  
 膳正常成四陣ハ至田必轉城主自時無指守安面五  
 陣ハ則本陣とて。惣大將夏好公と初免藤本勢方の  
 面々小貨長四郎春秋青田長助唯取旺尾角之

悉厚面引居及彌宗近家敷賣九郎安供  
 小塚井不十郎常從奥住裏彌棟洩等と始め  
 阿玉角右門常時小買之誓夫安高白見九良  
 太夫氏性屋茂目倉四郎青居花太郎とて  
 此ハ一騎當千の食負臣とてつがへ後陣小つぐ大將  
 小ハ食相股垣の城主肥内皮癩守海盛後井入道  
 偏亭齋次小大軍師不断山子の隠士二面將監成  
 安かのく前後と亂さばいて。稜よとて禪の



黄金色ある旗をふる。是の吹貫馬は。皆そまじくの挿物は。風這はせて立る。其會相いそんか。る。暮相々として。押出さへ。實小見を。見へり。係る所は。福方。田有志摩守。金爲の軍配として。共先鋒。二陣。元安。買能守。賣高。三陣。身臺。大治。吉。四陣。海辺。大船。大夫。積敷。是も。第五。本陣。御大将。福富。平。金持。卿。軍師。金爲。始。先。家の長臣。

左右は。順へ。旗元。勢の面々。慈悲。尾正。截。胸好。大多。田地。昂高。持。加瀬。木爲。五。昂。伸安。高利。盛之。助。金延。堀。出。四。昂。徳成。志。枕。坊。柿。實。濱。辺。截。之。進。並。建。釜。戸。救。右。工。門。み。ど。皆。金。銀。の。六。具。之。の。免。後。陣。ハ。氣。野。長。登。守。春。豊。あり。其。勢。都。合。九。億。八。千。貫。目。余。騎。觀。樂。城。出。陣。して。寶。積。川。さ。ら。ち。渡。り。繁。昌。塘。を。右。小。と。り。子。孫。も。長。之。繩。手。道。榮。之。嶽。の。こ。る。と。る。豊。が。原。よ。ぞ。陣。取。り。の。く。き。バ。同。ト。く。會。軍。



豊原の  
福留の  
諸將  
準備  
之  
圖



金福軍記二編

上ノ四



も。日敷重よて往程又堪へりける原を越へ不如意が  
 嶽の禁ある。俛の河辺は諸軍を休免福方の様子  
 ざりけりし先手の陣あり飛馬も。注進をさせさ  
 と西又彼福方への得ありも。有福長者の警軍をも  
 つく。豊が原又本陣をくまへ国有仕満守を軍帥として  
 早陣備へせぬを由ありと告るを聞て貪性ども  
 いづ一討又倒しそと人とな卒頻り又いささ立軍  
 帥一面將監成安へ。あらそふ又草色の鼻うごりし。

諸軍示し申るへいふふてのありいとも此を  
 の合戦へ貪福分免の勝負して福を倒し貪を  
 敵らも是こみ游子の爲の戦ひをば飯よも真  
 の人情をつくさごとへひらぬと思ふべり唯其前  
 後をこれあへど減多無上又借倒し。又買掛玉を  
 さらふとて直安の物も目まけむ高むくみし  
 直高の品を口小まりし取返むべし。何きも倒と  
 するべりばと無茶九茶りて是を示し。世話や



馬場ばばも本陣ほんじんと定免さだまへ盛衰山さかざかの中なかに居ゐる。貸付かひも  
 たがいの英氣えいきを増ましめ、寄よると待まちたけり。さる程ほども  
 貸付かひ方の先陣せんじん。借金かりかひ負お身み守まもり。歳益としえきの心こころのうちみかのみ  
 不ふ我わが令しやう味方あじかたの先鋒せんぽうといふ。山やまより高たかた借金かりかひを身み  
 又また請うけり。安閑あんかんといふ。内うちは敵たてありさびしく催まよはされてハ  
 寄手よせをふせぐ主しやう陣じんあり。得とくけ方かたより押おしつけは断ことわり  
 り。福者ふくやは損失そんぶをくらむ。目めは  
 なる見みせんと馬うまもよぶ。吾手わがての主しやう率りつも下げ知ちを傳つとへ

大身おほみの鎗やり操さくひつぎ。敵陣たてじん近ちかく押寄おしよる。是こゝを見みる  
 福方ふくかたの先陣せんじん。仕贈しそく仕賀守しがまもり元方もとかたあり。へると身み上あがりと  
 くれめ自ら先頭せんとうは馬うまを出いす。大音おほね上あがりは呼より。悪あくは  
 借金かりかひのあらまのうら。おのこは是こゝまで幾度いくども。このそく手て  
 幣かざりを平ひらるといへど。唯ただの一度ひとたびも返答へんたうあるさ。重おもなる元利もとぐちは  
 目めもろけど。あは共上ともあがりは代呂物しろものといふ。内うち入いり門かどあるさ  
 ぞ小置こまいける甲斐あひある。貸付軍かひぐん小心しんしんをよする。齋いはい根ね生せい  
 平氣へいきの面おもてつた奇き怪かいあり。者ものどもこのまを生捕いけとらて。こゝ



代呂物を咄たさせと怒りとも下知るべバ歳益是を  
 死くありの空穴ととうち笑ひ其代呂物がべんくといり  
 追こが手不在ののでとくぶち殺してはあつてあきばあ  
 糸え死出さることあるべし。己のごと死瘦福又取引とべ  
 死我るらひと席不倒して具人のめと口鉄炮を不ん  
 くと放しうとさば元方もいりぞり替も勘弁とべ死  
 家賊雜具いふふおよむと附物追も引とすと両軍  
 たがひよさの死せけづる赤目を約て戦ふ内福方仕贈

仕賀守の良等不。高井氣右三門行過と名集。口先威  
 の鎧又毛色のちがふ死を着る。同氣性の舌あぐよ  
 面厚皮の鞆をかたむとく憎した助又が里方手不  
 あまる大賊布をたづさへ金持風をあせつ。肩いのらして  
 出るありさぬ如何ある当主とつる者でも断えを者  
 のあらト。行過眼と八方不倒り大音上又申るはい死  
 金具者の奴むら瘦腹くらへくよつとさけ。吾こそは仕賀  
 守の内よりく。金具之の懸先とり歩く。高井氣右三門



行過あり。我と拂人者何ら。早く来つて返還せよと云  
 さよ貧乏の中おけ入あるを幸ひ取廻り難義せせ  
 のけ回る。其とり立るとて。節季を延と者とあり。  
 矢庭小家とすること。五六軒このうけ取又及ばるとして。  
 貧乏先陣いろとる。既又備へせとて。斯と  
 みるより。眞身守の怒りの顔色りろとも。小ち甲斐も  
 る。味方の貧乏。えやく彼奴とべらちとれと聲の下ふ  
 貧乏より。我鳥武者と呼びて。焼無茶一騎道落おじ

の鑑は向行つた。焼を著る。拂ひかゝる。毛の馬又股がり。  
 肩色とちる。士卒よ。ぬへど。嘘八百貧目の重さある。  
 貧乏棒といふ棒ありまへ。起り立ると福勢と。いこうと  
 志ごひは借倒し。人の物をべたを取ること。至極極法よ  
 突廻り。いま行過と見ると。むとしく。大聲上りて。火と  
 ころる。借金。眞身守。歳益が内は。何つて。そむけ無茶  
 と呼ぶ。非道無理之助。唯勝る。いで行過ると。その  
 土根性。うしと。ばましく。と。きんごと。云々。貧乏棒とあり



あけて討つかるせ行過へ猪子あるむらる腹いよこつと  
 餓餽又志てくきんと。同く歎ふ大敗布。うけつ流しつ  
 質かくごとく。這方ハ名よはか貧乏棒のわけ無茶彼方の  
 氣りこの大敗布たかひ又火花さちりといひ歎ひ教刻又  
 かくふとりへど。さうふ勝負も分ざるふ。この無理之由唯勝へ  
 血氣盛んの晩無茶よて心いら立て怒りせりりり。  
 この貧乏棒さつて力らよ任りてあだ創をせ行  
 過是を請そん。横腹うけて討き一ふ何ふりり。

たのむべた。さ一の氣右門行過も無理の助又勝  
 きぬ喩へ腹の虫まで殺さきて其俵馬上ふりり。  
 日頃手あるき大敗布も空しく中ハ明らると重た  
 貧乏不倒さきて。此世をさして極樂又ちらで無悲や  
 地獄帳。今ハそとさへ棒さりと消へてあくるり。  
 こころをさるより貧乏の報謝又あくるん食のごとく。  
 我あとらりと福方又あれたさけんで突入けき。  
 たのこと見へ一行過りし理非も分らぬ貧乏軍

上ノ六

上ノ六



の無理の助よへのあつと合手ふる者一人もあく。  
こるえぬる不吐ひたて。福方先陣を更さみごとし。  
左右へこそ別きりり。斯とみるより貪性ハ勝ふ葉ト  
て勇立こをたやくと主員入谷二陣は備へ一福  
將ハ元安買能守貴高。手勢を下知してそあへて  
かこり立ふる貪軍は冠をろろく渡り合らさせんぞ  
ふせたと先大將元安買能守。自ら真先は馬を出し。  
小判の黄龍へけらり。大音上は下知るとアふ者ども

かあらごと由断を邪根性は欺さきて偽物安物らひ  
あがるみ。米積は追まゐる貪勢のよたは宮物とふるあ  
ば。見倒しはみせして直切りころは金づえさせ。  
元がひさらしてするべしと四方八方あけ回り。聲を限よ  
走るふぞ何糸士卒の猶隊をべたかのき利高は買取  
んと。或は直ぐり亦へむや。さらは賤布の口を明ひハ  
貪方もあろく。幾人直をつけ来るとも。まことしハ  
肩引へせと鼻であらひ戦ふらち。貪方二陣ハ





高井右衛門行遇

上卷



高井右衛門行遇

上卷

高井右衛門行遇  
 非道無理之助唯勝  
 一騎討之圖



ひりへる。泰嘉身濃守冬面。先手の軍を助くべし。と  
手勢を引てのけ来り。負身守小力と合し。一手不成て  
元安と。のけ倒さんとせし。福方三陣とれを見り。  
身臺大治郎季吉。あましく万卒とて。飛が如く  
又味方を助け。貧富の両軍入る。志の死を刪りて  
戦ふあり。借金積る山のごとく。貧ハ流さる。泉の  
ごとく。うらり又勝敗をうらり。保る所又貧方の泰  
嘉身濃守冬難ハ。身をとむべし。六具もあ。漸やく

天道にむやりして張がて作りの魁を著る。其外さら  
又著るものあり。年中をぶらのらり。あましく。惣身自  
由又働させ。嚴氣日ごろ又十倍して。或はこぬしで。あま  
まはる。又ハ且又ま。蹠を倒し。傍者無人のあましく。身  
臺大治郎季吉ハ。けあり。あましく。見るよりも。悪た泰嘉  
瘦腕にて。あて回ること。とつひる。者共をやく。いけ  
取て。彼奴の。昂首うち落せと。たけ。く下知をつて。し  
あましく。難さひ。く嘲笑ひ。何もあましく。ざる。純和規め。この



冬難の首へあろう。手拭ひとことど落と登りや、鯨も  
 ののせやと一なる様へあひと云あぐら。李吉目がけ  
 討つるが心得とて扱合せ。志をさへさへ居とて  
 ども心へうた身臺も。今冬難の合身力不。いうでり敵  
 とふことあふ。既に危くみへるところ又李吉の島ホ  
 む人も知つる。大丈ま河内嶋之進為好。手織著三  
 郎徳成。兩人走附主とてけ。彼冬難をあふと  
 左右ひとく立むつひ。秘術をつくして戦ひれば泰

嘉冬難大ひは怒。巴を常着の分ざいとて奥嶋  
 代りへうの腹の。今よその首引ぬい。眞不殺して  
 へまんとと。猛り狂ふく切むとむ。心ひさ立向ふとへと  
 敵もまふと。強者まで。當座又破る。氣づらひも。  
 づらの暗さる。性ぶるま。糊つけく。こころあひ戦い  
 数刻よあふ。と。いさ。勝負もつら。折のら  
 合身方三陣の大將。原井内膳正常成書出の旗  
 先又押込。拂。日延一の鎧。たを。氣のう。と。首



さらし又着し。一銭をー毛ののぶとくあつた。駒ふ  
 おごつて。晦日拂ひと記する。仙過の押物べりつる。皆  
 性る。地の鎗を引さげ。吾手の貪婪まごがて。嚮の  
 味方よ力をあへせ。一時は福を倒さるめと。ごきちあふ  
 ころ。兩軍又面もあらざり。不實のたのひ  
 るせ。福方うとるもの。彼奴よも先季の  
 残りあり。とく懸とよと呼り。一軍是より  
 何の古帳まじり。置をたひて責立を。

耳はもうけを空うそふた。知らぬ。たてた。ひかり。  
 かりから。信方小敷ふ。泰嘉身濃守冬。難へ。為好  
 徳成の兩人を。終又着殺し。立上り。尚身堂を倒して  
 ときんと共勢ひ。破竹のごとく。貪方惣軍一同よ。  
 勇氣さるんよ。のけ向へ。福方こそ。又氣おと。し。  
 三陣とも小備を。と。誰一人止るもの。四陣を  
 さし。あぶ。ご。の。る。を。四陣又。批へ。福將の。勇力無双  
 と云。海。大船。大積。敷。あり。斯。敗。走。る。味方



小のまへにぞ吾手の士卒小下知を傳へむとの長者の  
 備へばこと待問も何れも金勢ハ勝又棄トて前後を  
 ことごと四陣の大軍一同小福とたをことハ此時より金持  
 卿さうちとことヤ進受わくこととたをこと買ひつと買ひつと  
 こと押寄る。

笑談金福軍記二編卷之上終



